

「古典に親しむ」態度を育む古典単元の授業デザイン

— 『枕草子』と『古今和歌集』に表れた季節感の比較を通して—

玉川大学教職大学院・院生 鎌田 綾香

1 問題の所在

平成29年告示中学校学習指導要領の「第1節 国語」の「我が国の言語文化に関する事項」では、全学年に共通して古典の世界に「親しむ」という言葉が用いられるようになった。だが、「親しむ」ための手段・方法の記載はあっても、「親しむ」がいかなる状態のことを指すのかは、明示されていない。このように、「親しむ」の状態が曖昧な中、竹村信治（2012：25）は「respectこそが関係の近しさ（古語「なつかし」の状態）を育み、“生涯にわたって古典に親しむ”態度の形成をも準備していこう」と述べ、「中学校の古典学習は、このrespectの育成を究極の到達点とするといってもいいくらいだ」と主張している。そのrespect醸成の起点は、「文」との「出会い体験」にあり、その体験は「新たな表現の創造」にもつながっているとす。竹村（2012：24-25）の言う「親しむ」の本義は、広義ではなく、狭義の「親しむ」を指す。

松本修・井上幸信（2011：2）が伝統的な言語文化の単元や学習を考える時の「二つの極端な形」として「知識を説明したり覚えたりする形」、「親しむ」「楽しむ」ことを優先させた「音読や暗唱に走る形」を挙げ、ここで言う「親しむ」は形骸化した「親しむ」であると指摘している。

こうした形の学習活動では、竹村（2012：25）が述べるrespectは醸成されず、形骸化した広義の「親しむ」が到達点となってしまう。学校現場において一般的に行われている学習活動も、活動次第では広義の「親しむ」で終わってしまいかねない。文部科学省 国立教育政策研究所（2013：14）『平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査』によると、「古典は好きですか」という質問に約70%の中学生が否定的な回答を示している。この古典に「親しむ」どころか、古典を嫌っている生徒が多い現状は、広義の「親しむ」を到達点とした学習だけでは、「古典に親しむ」態度を育むことは困難であることを意味する。

こうした問題に着目し、本研究では「古典に親しむ」態度を育むための授業デザインを考案し、検証していく。

2 研究の目的と研究仮説

小学校から高等学校における古典学習の代表的な教材の一つである『枕草子』の序段「春はあけぼの」の授業の一般的な学習内容について、有働裕（2015：28）は、「表現に気をつけながら原文を繰り返し音読したり暗唱したりする、現代語訳から大意を把握する、感想を互いに発表しあう、現代版「春はあけぼの」を作る」とまとめ、目標と学習内容間の落差を指摘している。

一方、全国の中学校で最も採択されている光村図書の教科書『国語2』（平成28年度版）古文「枕草子」では、その指導展開の例として、音読や感想の共有、現代の季節感と清少納言の季節感を比較させ、作者のものの見方や感じ方を捉える、自分流「枕草子」を書き、「枕草子」との共通点や相違点について感想とともに話し合うなどの活動が学習指導書に挙げられて

いる。一見すると、目標と学習内容の間に落差はなく、指導展開に特に問題点は見当たらない。

しかし、古典指導において古典と日常生活との照合が鑑賞の定石のようになる点には問題がある。長尾高明（1990：11-12）は、現代的基準でのみ古典を評価することには、「古典の読みをゆがめたり安易な解釈に終わってしまったりする危険」や「生徒の興味を惹くに足りないものになる恐れ」があると指摘する。先の学習指導書に記されたような学習活動では、「清少納言の独自性」に気づくことなく、安易な解釈で終わってしまうだろう。それは、学習のまとめである「自分流『枕草子』」が、『枕草子』を詳しく読まずとも書ける世間一般的な季節の文章になるという形で表れる。そうした現代的基準でのみの古典評価では、「ただでさえ、言語抵抗という壁にぶつかりやすい古典学習」が、「古典の内容はしょせん古臭く、底の浅いものだ」という不満を残しうものになりかねない。長尾（1990：9-14）は「古典はあくまでも古典として読む態度が必要である」と述べ、その具体的方法の一つとして「同類のものや対比的なものなどを読み比べること」（比較考察の方法）を提案している。

つまり、現代的基準でのみ古典を評価するような古典と現代の比較を主とした学習では、生徒たちに「古典に親しむ」態度を育むことは難しいのである。そこで、本研究では「古典を古典として読む」ための具体的方法として、比較考察の方法を取り入れ、『枕草子』序段を扱った古典単元の授業デザインをし、生徒の「古典に親しむ」態度の育みとその関連性を明らかにする。比較考察の方法を取り入れた学習を行うことで、竹村（2011：20-23）が述べる respect 体験が生まれ、生徒の「生涯にわたって古典に親しむ」態度が育まれていくと考える。

3 授業デザインの概要

全国の中学校で最も採択されているという理由の下、先述した光村図書「枕草子」の問題点を踏まえ、光村図書『国語2』の「枕草子」を基盤とした授業デザインを行う。

○単元名 広がる学びへ 古文「枕草子」 （光村図書『国語2』）

○単元の目標

- ・現代語訳や語注などを手掛かりに『枕草子』を読むことで、作品に表れた作者のものもの見方や考え方をすることができる。（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア（イ））
- ・『枕草子』に表れた作者の文章表現の効果について、考えをまとめることができる。（「C読むこと」(1)イ）
- ・自分の考えが伝わるよう、具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、工夫して、自分流「枕草子」を書くことができる。（「B書くこと」(1)ウ）

○単元指導計画 表1参照。全4時間。

表1. 単元指導計画

時	主な学習活動
1	①古典（『枕草子』）を学ぶ理由を書く。 ②全体で本文を音読したり、内容をおおまかに把握したりする。 ③『枕草子』に似た文章を書く。
2	①『枕草子』の風物（「あけぼの」、「夜」など）、情景描写をまとめ、重要語句の意味を確認する。
3	①『枕草子』と『古今和歌集』を「季節感」の観点で比較し、気づいたことをまとめる。 →『枕草子』には清少納言独自の季節感が表れているということを確認する。
4	①これまで授業で学んだことをふまえ、自分流「枕草子」を書く。 ②古典（『枕草子』）を学ぶ理由を書く。

3. 1 授業デザインにあたっての考慮

3. 1. 1 「古典を古典として読む」ことの具体的方法としての比較考察

『枕草子』序段「春はあけぼの」との比較には、「清少納言の独自性」に気づくために最も相応しい作品だと考えられる『古今和歌集』を用いる。

『古今和歌集』は『枕草子』と同様の平安時代に成立した我が国最初の勅撰和歌集であり、四季の歌と恋の歌がその大きな柱となる。多くの歌人によって詠まれた 342 首の四季の歌からは、当時の典型的な季節感を読み取ることができる。『枕草子』と『古今和歌集』を比較することで、清少納言の季節感がいかに当時の典型的な季節感と異なっていたのかが明白になるのである。

『古今和歌集』との比較を取り入れた授業は、藤本宗利（2003）や吉田茂樹・武久康高・渡邊春美・今村有紀（2018）によって、すでに提案されている。どちらの提案も清少納言の「季節一時間帯」という表現の仕方に注目している。吉田・武久・渡邊・今村（2018：63）の提案する授業では、『古今和歌集』は清少納言の「当たり前のもはあえて取り上げない」という表現や「一般的に好まれないものを評価する」という表現の工夫の理解、藤本（2003）と同様に、通俗的な美意識が「季節一景物」の構造になっていることへの理解に役立てられている。

本研究の授業デザインでは、藤本（2003：162）が提唱する「季節一景物」ではなく、あえて「季節一時刻」の構造にすることによって、「景物」の存在を浮き立たせるといった点に清少納言の表現の新しさがあるという論にはのらず、あくまで『枕草子』には、①当時の典型に捉われない清少納言の独自の季節感が描かれていること、②清少納言の表現の仕方、の2点に学習者自身が気づき、学びを得るために『古今和歌集』を用いることとする。文学研究の成果を取り入れることは重要だと考えるが、理解に困難を伴うような論点は「古典」が難しいものであるという認識を与え、学習者との距離を生み出してしまう。

3. 1. 2 『古今和歌集』の提示方法

比較考察において『古今和歌集』を用いる際は、四季の歌 342 首すべてを学習者に提示するのではなく、予め授業者が選定した和歌を提示する。提示する和歌は、各季節 2 首ずつの全 8 首と定める。和歌が多ければ多いほど、学習者自らが当時の典型的な季節感を発見できるが、その分多大なる時間を費やす上に、学習者の集中力を奪い、古典への興味から遠ざける結果となることが予想されるためである。選定にあたっては、以下を基準として設け、いずれかの基準に当てはまった和歌を、各季節 2 首ずつ選ぶものとした。

①各季節の代表的な風物が取り上げられている歌

春：花（桜・梅）、鶯

夏：ほととぎす、花橘、夜

秋：風（秋風）・天の川（天の河原）・たなばた・夜・虫（きりぎりす・まつ虫・ひぐらし）
・雁・鹿（「鳴く」と関連）・秋萩・露（白露）・女郎花・菊・もみぢ（紅葉）

冬：雪、「さびしさ」を連想させる言葉（人はおとづれもせず・人目も草もかれぬ）

②季節または時期が分かる言葉が含まれている歌（「春」「夏」「秋」「冬」など）

③意味の理解が容易な歌（詳しい注釈なしに理解できるもの）

④学習者がこれまでに触れてきた『百人一首』に含まれる歌

⑤3年次において光村図書『国語3』の「君待つと一万葉・古今・新古今」に取り上げられている歌

上記の基準をもとに選定した結果、次の和歌を提示することとした。なお、提示する和歌には

現代語訳を付した。また、下線を引いた語句には注釈を付け、解釈がしやすいようにした。

春	53 世の中にかえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし 在原兼平朝臣 ①②
	88 春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなれば 一本大伴黒主 ①②③
夏	140 いつのまに五月来ぬらむあしひきの山ほととぎす今ぞ鳴くなる よみ人知らず ①②
	156 夏の夜のふすかとすればほととぎす鳴くひと声に明くるしのの夜 紀貫之 ①②③
秋	169 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる 藤原敏行朝臣 ①②③④
	215 奥山にもみろふみわけ鳴く鹿の声聞くときぞ秋はかなしき よみ人知らず ①②③④
冬	315 山里は冬ぞさびしきさきりける人目も暮もかれぬと思へば 源宗千朝臣 ①②③④
	330 冬ながら空より花の散りくるは夏のあな立は事にやあるらむ 清原深養父 ①②

4 授業実践の分析方法

- 対象 公立中学校 第2学年 2学級 (77名)
- 実施時期 令和元年6月
- 授業時数 各4時間
- 検証方法 ワークシート分析、プロトコル分析

(1) ワークシート分析

4時間の中で用いたワークシートのうち、主に第1時と第4時のワークシートより、分析を行う。「古典に親しむ」態度が育めたかどうかを判断するにあたっては、竹村(2012)の「respect 醸成の起点」を用いることとし、以下のようにまとめた。

〈respect 醸成の起点〉

※下線部の「声」はテキストとの「出会い体験」にあたり、矢印の先に示した言葉はその「出会い体験」からつながった「新たな表現の創造」にあたる。竹村(2012)は「respect 醸成の起点」は下線部の「声」にあるとしている。なお、説明文は下線部の「声」に対するものである。

①「それ、それ、そういうことなんだよ」→「こうも言えるよね」
体験済みのことをどう相手に伝えるかが悩ましい中で、それを言いあてた表現と出会ったときに発せられる。
②「そんなこと考えたことなかったけど、確かにそういうことはある」→「私なら、それにはこう応えるな」
「問題」が共有され、体験の対象化、意味づけ、整理がそこで進み、思索が深められ、テキストを介した心的経験からの応答として発せられる。
③「そんなふうに考えたことなかったけど、そう考えるといいかも」→「でもこんなこともあるから、こうも考えられるよ」
ある「問題」をめぐる学習者の対話の作法がテキスト内で展開される対話との出会いを通じて修訂更新される局面で発せられる。

ワークシート分析とプロトコル分析によって、①から③に見られる声と一致した考えが見られた場合、「respect 醸成の起点」に達したと判断する。また、竹村(2012:25)が「出会い体験」「新たな表現の創造」の間に respect が醸成すると述べていることを受け、「出会い体験」から「新たな表現の創造」へのつながりが見られた場合は respect が醸成されたと判断する。

respect が醸成されたと判断できた場合は、「古典に親しむ」態度が育まれたと考える。

(2) プロトコル分析

ワークシート分析を主とするが、補助的分析として学習者の会話記録についても分析する。学習者のグループ(4名)での意見交流をICレコーダーで録音し、ワークシートからでは判断できない学習者の思考過程を把握することに用いる。会話記録の記述については、松本修(2015:5)が示している質的三層分析の書式に従うこととする。

5 授業実践の分析

第1時、第4時ともに、着眼点を「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」「自分流『枕草子』」の2点とする。この2点からは、授業前後の学習者の変化を読み取ることができる。「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」では、本単元の授業より学習者が見出した考えを分析し、「自分流『枕草子』」では第1時と第4時でどのような点が変わったのかを分析する。分析にあたっては、「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」および「自分流『枕草子』」の変化に関連性が深いと判断したものをプロトコルで取り上げた。これらの分析結果を「respect 醸成の起点」の観点で考察する。

分析および考察は、(1)「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」「自分流『枕草子』」ともに変化あり、(2)「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」に変化なし、(3)「自分流『枕草子』」に変化なし、(4)「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」「自分流『枕草子』」ともに変化なし、(5)その他、の5つのタイプに分類し、タイプの特徴が顕著に表れている学習者を抽出して、行った。本稿では(1)のIsのみ例として取り上げる。

5.1 「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」「自分流『枕草子』」ともに変化あり

例. Is

時	古典(『枕草子』)を学ぶ理由	自分流「枕草子」
1	大切だから	春は春風。気持ちの良い春風吹ききたる。春風にあたるのもおかし。
4	今の人が使っている言葉はすべて昔の人が使っていたものから来ている。その人がどんな言葉を使い表現していたかを知るため。	秋は景色。葉が赤く染まり若かった山が少し大人な山と変わるのをかし。また、赤・黄・緑となりちがった景色が見られるのをかし。

〈分析〉

「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」について、Isは第1時の時点で「大切だから」と記述している。第4時になると、「言葉」に着目し、古人がどのような言葉を使い表現していたのかを知るためといった理由に変容した。第1時の時点での「大切だから」という理由は、2学級の中で最も多く記述された理由である。

「自分流『枕草子』」では、第4時になると「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」で言葉や表現に着目していたことを裏付けるような文章を書いている。第1時では「吹ききたる」や「おかし」(原文ママ)といった古文の表現が見られる。『枕草子』を倣って、古文の表現に挑戦したと予測されるが、「気持ちの良い」という直接的な表現を「春風」の修飾語として用いている点や「吹ききたる」「あたる」など、「状況」を述べただけになっている点からは、具体性を読み取ることができない。しかし、第4時では直接的な表現が消え、具体性を帯びた映像的な描写が用いられるようになった。特に、「若かった山」「少し大人な山」という表現が印象的である。

「若かった山」は葉が青く生い茂った夏の山の比喩であり、「少し大人な山」は葉が赤く染まり始めた秋の山の比喩であると考えられる。また、「赤・黄・緑」という色彩表現も加わった。

続いて、第3時に行われた学習活動のIsの発言に注目する。学習活動では、『枕草子』と『古今和歌集』を「季節感」の観点で比較した。

7組2班 (Oy, Sn, Is) 第3時 学習活動

- | | | | |
|------|--|-------|--|
| 1 Oy | どこが違うか。 | 9 Sn | =結構そのままじゃない? |
| 2 Sn | どこが違うか書いてるだけじゃないの?え?言う意味ある? | 10 Is | でも、絶対これ、これ、この人が書いたらさ、何かピンクの(2)花、// (笑) とかなりそうじゃない? |
| 3 Oy | () | 11 Sn | // (笑) |
| 4 Is | (笑) | 12 Oy | // (笑) |
| 5 Oy | 春の心はのどけからまし。(18) | 13 Sn | だって、雪が降ってるのめっちゃいいとか書いてるしさ。//雨降ってるのもいいって超ストレートじゃない? |
| 6 Is | じゃあ、枕草子は、季節の、言葉を(4)あの(3)あれじゃない? <u>ぼかして</u> 言ってるんじゃない? | 14 Is | // (笑) |
| 7 Sn | ぼかしてるの? | | |
| 8 Is | だって、そのまま言ってないじゃん。これさ= | | |

1 から 14 は、学習活動冒頭の会話である。6 Is は、『枕草子』は季節の言葉を「ぼかして言っている」と言い、それに対する9 Snの「結構そのままじゃない?」という発言に、10 Isは「でも、絶対これ、これ、この人が書いたらさ、何かピンクの(2)花、// (笑) とかなりそうじゃない?」と反論をしている。ここで、Isは清少納言が「ぼかした」表現を使っていると主張している。『古今和歌集』の「桜」を清少納言であれば、「ピンクの花」と書くのではないかと予想している点から考えると、Isの言う「ぼかした」表現とは、ある物を単語で直接的に表さず、その特徴や色を描くことで、その物を映像的に浮かび上がらせるような具体的表現のことを指すと想定できる。一方、Snは、13 Snの「だって、雪が降ってるのめっちゃいいとか書いてるしさ。//雨降ってるのもいいって超ストレートじゃない?」という発言からも明らかのように、清少納言の具体的表現ではなく、批評的な表現に焦点を当てている。

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|----------------------------|
| 52 Is | =夏は夜。 | | かそのままじゃない? |
| 53 Sn | 夏は、月と、闇夜の蛍() | 62 Oy | //31音。何て言うんだっけ?何とか的とかじゃない? |
| 54 Oy | 季節感の観点で。 | 63 Sn | 古歌とか、文字数決まってるから、あんま書けなくない? |
| 55 Sn | 何か、ほととぎすの歌しかない。// (笑) ほととぎす大好き人間かな。 | 64 Oy | //あ: : |
| 56 Oy | // (笑) ほととぎす//す。さくら。 | 65 Is | //う: :ん。 |
| 57 Is | (笑) //かわいそう。(3) でも、こっちの方が細かい。 | 66 Oy | 随筆はもう、作文みたいなもんだよ。 |
| 58 Sn | うん。 | 67 Sn | 作文。(笑) (20) |
| 59 Is | 何か。枕草子の方が細かく書いてる。(3) | 68 Is | こっちの方がおおまかじゃない?(5) |
| 60 Sn | そもそも長さが違うんだけど。 | | |
| 61 Is | こっちの方が細かい。//こっちなん | | |

話し合いの中盤になり、「夏」についての比較が始まった。ここでは、57 Isの「でも、こっちの方が細かい。」という発言によって、『枕草子』の描写の細かさに注目が集まった。だが、

またしても Is の発言と 60 Sn の「そもそも長さが違うんだけど。」とで、意見が分かれた。60 は、作品のジャンルの特徴を踏まえた上での発言である。だが、その発言を聞いてもなお、68 Is は「こっちの方がおおまかじゃない？」と『枕草子』の表現の繊細さに注目し続けた。

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|----------------|
| 99 Is | =秋は夕日と (3) こっちの秋は？ | 108 Sn | 紅葉と鹿。(笑) |
| 100 Sn | 秋は：：鳥？＝ | 109 Is | 全然違うじゃん＝ |
| 101 Is | =風の声。 | 110 Sn | =あんま変わんなくない？ |
| 102 Sn | 鳥と風と、虫、の音。 | 111 Is | え、違くない？結構。え、でも |
| 103 Is | こっちが？ | | ここは一緒じゃない？虫と風の |
| 104 Sn | 枕草子は、//鳥、虫、風。 | | 音って違う？(笑) |
| 105 Is | //こっちは？(2) こっち、風？ | 112 Sn | (笑) 同じ。同じだと思う。 |
| 106 Sn | こっちは風と＝ | 113 Is | (笑) 違うかな？ |
| 107 Oy | =鹿。 | | |

話し合いも終盤となり、秋についての比較にうつった。秋の風物が出そろった段階で、Is は『枕草子』と『古今和歌集』の風物を見比べて、109 Is で「全然違うじゃん」と発言した。『枕草子』と『古今和歌集』に取り上げられた季節の風物に違いがあることに気づいたのである。さらに、110 Sn の「あんま変わんなくない？」という発言を受けて、111 で共通点も見つけた。

第3時のプロトコルによって、Is が①『枕草子』は具体的な表現で描かれている、②『枕草子』の方が『古今和歌集』に比べ、描写が細かくなっている、③『枕草子』と『古今和歌集』に取り上げられている季節の風物はほぼ異なる、という3点に気づいていたことが判明した。さらに、Is は Sn との対話により、清少納言の批評的な表現や作品のジャンルの特徴、『枕草子』と『古今和歌集』に共通した風物があることについても考えさせられたと判断できる。Is は季節の風物が両作品で異なることに気づきながらも、特に清少納言の表現方法に着目して『枕草子』と『古今和歌集』の比較考察を行っていた。だからこそ、「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」が、「大切だから」といった表面上の理由から古人が「どんな言葉を使い表現していたかを知るため」と言った理由に変容したのだと考えられる。また、その理由は「自分流『枕草子』」にも反映された。第4時の「自分流『枕草子』」では、第1時で見られた直接的な表現を用いず、山を「若かった山」「少し大人な山」という比喻表現で表したり、「赤・黄・緑」といった色彩表現を取り入れたりしていた。比喻表現や色彩表現により、その光景は具体性を帯びた。この Is の変容には、第3時の学習活動での気づきが影響していることが明らかとなった。

〈考察〉

以上の分析結果を「respect 醸成の起点」の観点で考察すると、「respect 醸成の起点」の①から③の「声」を直接聞くことはできなかったが、「出会い体験」から「新たな表現の創造」へのつながりは見られたと判断できる。

Is は、第3時の学習活動によって、先述した3つの気づきを得た。「古典(『枕草子』)を学ぶ理由」の記述より、Is が様々な気づきの中で、特に表現方法に着目していたことは確かである。Is にとって、『枕草子』と『古今和歌集』の比較を通した「出会い体験」は、表現方法の気づきにあったと言えよう。第4時の「自分流『枕草子』」で Is が、色彩表現や比喻表現などを用いて、表現の方法にこだわっていたことは、その「出会い体験」がもとにあったことを示している。表現方法に関しては、話し合いの中で Sn が指摘したように、両作品の散文、韻文といった文体の違いが影響を与えた可能性も十分に考えられる。だが、清少納言独自の季節感

や表現方法の発見に、『古今和歌集』が適していたことに変わりはない。

Isの「自分流『枕草子』」には、こうしたテキストとの「出会い体験」のみならず、「新たな表現の創造」が見られる。Isは、山の状態を「若かった山」「少し大人な山」という比喻表現を用いて描いた。清少納言は、季節の情景を繊細に描くという映像的な表現により、文章を具体的にしていた。そこに、比喻表現は用いられていない。Isは文章の具体性を高めるために、色彩表現だけではなく、比喻表現を取り入れ、その具体性を高めたのである。また、清少納言は「秋は夕暮れ」として、「夕日のさして山の端いと近うなりたる」「鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐ」「雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる」などといった秋の情景を描いている。これは、いわば秋の景色である。Isは「秋は景色」として、季節で移り変わる山の色彩と秋に見られる「色」を描いた。その着眼点は清少納言にない新たなものであった。

このように、Isにテキストとの「出会い体験」から「新たな表現の創造」へのつながりが見られたため、respectが醸成されたと判断する。

6 授業実践の考察

学習者のワークシートを5つのタイプに分類、分析し、考察した結果「respect醸成の起点」の①から③の「声」を聞くことはできなかったが、抽出した学習者のうち、(1)と(2)のタイプの学習者に「出会い体験」から「新たな表現の創造」へのつながりが見られたため、respectが醸成できたと判断した。また、分析結果より、多くの場合「古典（『枕草子』）を学ぶ理由」が「自分流『枕草子』」に反映していることが明らかとなった。学習者77名の「古典（『枕草子』）を学ぶ理由」を表2の通り、分類した。各分類の人数を第1時と第4時でまとめ、第1時と第4時の差を最下段に記したのが表3である。

表2. 古典（『枕草子』）を学ぶ理由の分類

分類	内容
A	大切だから（作品の評価はここに含む。）
B	常識だから（基礎はここに含む。）
C	知るだから
D	日本の伝統に関するもの（伝承に関するものはここに含む。）
E	（当時の）考え方に関するもの（感じ方・感性に関するものはここに含む。）
F	（当時の）表現に関するもの
G	当時のことに関するもの（「考え方」「表現」を除く。）
H	その他

表3. 古典（『枕草子』）を学ぶ理由の分類の人数比較

時\分類	A	B	C	D	E	F	G	H
1	23	10	22	18	6	4	8	10
4	6	3	0	16	42	18	3	5
差	-17	-7	-22	-2	36	14	-5	-5

表3より、第1時で多く見られた分類A・Cという表面的な理由が、第4時では分類E・Fのように古人の「考えに関するもの（感じ方・感性に関するものはここに含む。）」「表現に関するもの」に対する理由へと変容したことが確認できる。特に増加したのは、分類Eである。分類Eに該当する学習者が書いた「自分流『枕草子』」には、「考え方」や「感性」に独自性が出ていた。分類Fも分類E同様に人数が増加しており、学習者Isの理由がその分類にあたる。分類Fに該当する学習者が書いた「自分流『枕草子』」には「表現」の仕方に工夫が見られた。respectが醸成されたと判断できた学習者の多くに、分類Eまたは分類Fの記述をしていることが共通していた。

また、分類Eと分類Fの記述が見られた学習者には、「独自の」「人によって違う」「それぞれの」「いろいろな」という言葉が多く用いられており、学習者が作者の「独自性」と「多様性」に気づけたのは、第3時の学習活動の効果であると考えられる。清少納言の独自性が、『枕草子』と『古今和歌集』を比較することで理解できたのである。第4時で書いた「古典（『枕草子』）を学ぶ理由」

には、「自分流『枕草子』」を書くにあたっての学習者の意識が表れている。

一方で、抽出した学習者の記述の中には、respectが醸成されたと判断できないものもあった。それらの学習者に共通していることは、①「自分流『枕草子』」が第1時の時点で『枕草子』の模倣になっ

ていること、②第1時と第4時で「自分流『枕草子』」に変容が見られないことである。①の学習者は、テキストとの「出会い体験」はしているが、「新たな表現の創造」へのつながりは見られない。②の学習者も、①の学習者と同様に、テキストとの「出会い体験」はしているが、「新たな表現の創造」へつなげることができていないと考える。

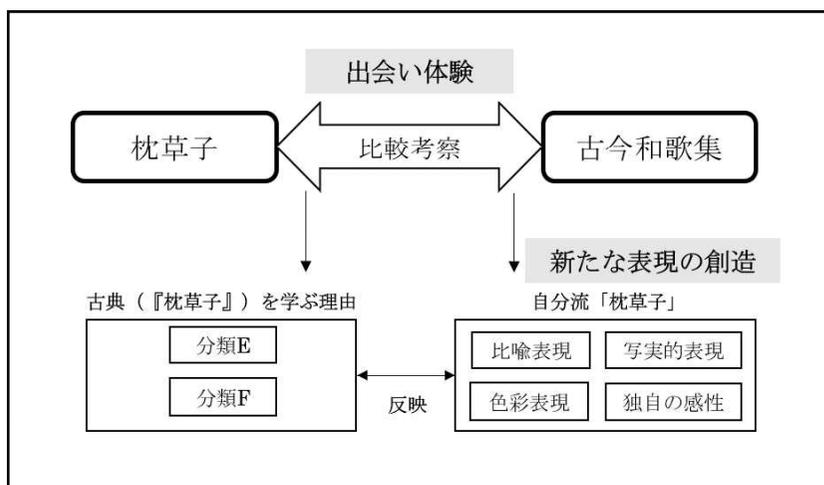


図1. 『枕草子』と『古今和歌集』の比較考察がもたらす効果

7 研究の成果と今後の課題

本研究では、「古典に親しむ」ことがより重視されているなか、「古典嫌い」の生徒が多数いることに課題意識を持ち、「古典を古典として読む」ことの具体化である比較考察を取り入れた授業デザインを行い、生徒の「古典に親しむ」態度の育みとその関連性を明らかにしてきた。

光村図書『国語 2』古文「枕草子」を基盤に、『枕草子』と『古今和歌集』の比較を取り入れた授業を実施したことで、多くの学習者の古典への意識が変容した。第1時では「古典（『枕草子』）を学ぶ理由」として「大切だから」「有名だから」といった記述が多く見られたが、第4時になると「考え方や感性に関するもの」「表現に関するもの」の記述が増えた。これらの記述の増加は、第3時の学習活動の効果であると考えられる。また、「自分流『枕草子』」におい

でも第1時と第4時で変容が見られた。変容が見られた学習者の多くの「自分流『枕草子』」に「古典『枕草子』を学ぶ理由」で記述したことが反映されていた。学習者の「自分流『枕草子』」は、『枕草子』を深く読まずとも書ける一般的な内容から、清少納言の独自性を理解したからこそ書ける独自の感性、表現が用いられた内容へと変容したのである。

これら「古典『枕草子』を学ぶ理由」と「自分流『枕草子』」の変容より、学習者にテキストとの「出会い体験」から「新たな表現の創造」へのつながりが見られた。「respect 醸成の起点」の①から③のどの「声」に当てはまるのか、特定することはできなかったが、respect が醸成されたと判断できたことから、「古典に親しむ」態度が育めたと考えられた。

「古典を古典として読む」こと具体化として、比較考察を取り入れることの利点について、長尾(1990:14)は①より確かで深い鑑賞を導く、②問題意識の明確化によって学習意欲が生じる、③作品の独自性を発見できる、という3点を挙げる。比較考察を取り入れた結果、テキストとの「出会い体験」が生まれ、その「出会い体験」を活かし、「言葉」として表すことで「新たな表現の創造」へとつながることが分かった。本研究より、「古典を古典として読む」ことは学習者の respect の醸成を促し、「古典に親しむ」態度を育むということが明らかになった。

一方で、抽出した学習者のうち、(3)(4)(5)のタイプに当てはまる学習者には respect が醸成されたと判断できなかった。テキストとの「出会い体験」はあったと考えられたが、「新たな表現の創造」は見出せなかったのである。「新たな表現の創造」なしに、respect が醸成したと判断することはできない。比較考察における学習者間の話し合いを工夫するなど、「出会い体験」を「新たな表現の創造」へつなげていくための方法を見出すことが今後の課題である。

プロトコル記号

- // 発話の重なり。直後の//のあとの発話が重なっている。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の=のあとの発話がつながっている。
- () 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。
- (3) 3秒の沈黙。
- (.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。
- :: 直前の音がのびている。「:」がおおよそ0.5～1秒の長さを示す。
- 直前の音が不完全なまま途切れている。
- 、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。
- ? 語尾の上昇。
- 。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。
- 下線部の音の強調(音の大きさ)。
- ° ° 間の音が小さい。
- (笑) 笑い声なし笑いながらの発話。
- (()) 注記。

文献

- 有働裕(2015)「教材としての「春はあけぼの」—『枕草子』初段の冒頭を読むということ—」『国語国文学報』73号, 25-33
- 高田裕彦訳注(2009)『新版 古今和歌集 現代語訳付き』KADOKAWA, 8-173
- 竹村信治(2011)「古典の読解力」『中学校国語指導シリーズ 充実した読解力養成のために』学校図書, 17-24

- 竹村信治 (2012) 「” 伝統的な言語文化 ” の掘み直し (下) — 『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に— 『論叢国語教育学』8号, 20-31
- 藤本宗利 (2003) 「「春はあけぼの」を活かすために—古典教材としての新たなる試み—」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ [古典編] 3』右文書院, 147-168
- 松本修・井上幸信 (2011) 「伝統的な言語文化の学習を成立させる条件」『臨床教科教育学会誌』11巻2号, 81-87
- 松本修 (2015) 『読みの交流と言語活動 国語科学習デザインと実践』玉川大学出版, 5
- 光村図書 (2016) 『国語 2』光村図書, 32-33
- 光村図書 (2016) 『中学校国語 学習指導書 2 上』光村図書, 75-91
- 文部科学省 国立教育政策研究所 (2013) 『平成 25 年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査』, 14
- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編』東洋館出版社
- 吉田茂樹・武久康高・渡邊春美・今村有紀 (2018) 「中学校における「春はあけぼの (枕草子)」の授業改善—小学校との接続を視野に入れて—」『高知大学教育学部研究報告』78号, 59-88